

# 1970年代の香港における左派思想

## ——毛沢東派『盤古』の思想空間

中 村 元 哉

はじめに	303
I 20世紀後半の香港における政治思潮	306
II 『盤古』の立ち位置と特徴	308
III 毛沢東派『盤古』への布石	310
IV 毛沢東派としての『盤古』	314
V ソ連批判と独自路線の追求	316
おわりに	318

### はじめに

---

毛沢東に対する評価がどうであれ、毛は反帝国主義と反植民地主義を実践しながら1949年に中華人民共和国（人民共和国）を成立させた。以後、人民共和国が主権を回収すべき地域はおもに香港とマカオと台湾となり、そのうち香港とマカオは20世紀末に中国に返還された。21世紀の現在、中国、香港、マカオ、台湾の関係は通称「兩岸四地」と呼ばれ、香港は2014年の「雨傘運動」からも分かるようにこの関係性の中核に位置している。

それでは、このような位置を占める香港に対して、毛沢東はどのような観方を提示してきたのだろうか。一般論として整理すれば、次のようになる。すなわち、毛は、イギリス領香港の主権を強引に回収することなく、冷戦下で東西の窓口となり得る香港を利用しながら対外貿易を発展させようとした、と。事実、彼は1963年の時点においても、香港はいずれ中国に返還されるのだから、しばらくその主権の回収に動き出す必要はなく、むしろ「今もし我われが香港をコントロールすれば、世界貿易や我われと世界との貿易にとって不利になるだろう」と発言していた<sup>(1)</sup>。この香港に対する観方は、1967年に当地で反帝国主義運動（六七暴動と呼ばれる反英抗争）が発生し、中国共産党機関紙『人民日報』の社論

「イギリス帝国主義が挑んできた戦いに断固として反撃する」(1967年6月3日)が同運動を支持した後も基本的には変わらなかった、とされる<sup>(2)</sup>。

それでは、香港の側は毛沢東をどのように観ていたのだろうか。この問題関心からは非ともおさえておくべきは、文化大革命(1966年～1976年)期の香港に毛沢東派が出現したという事実である。この毛沢東派は、おもに『盤古』と呼ばれる政論誌に集った。

この政論誌『盤古』は、日本では京都大学人文科学研究所でしかほぼ全号を確認できないため、日本の中国研究者にはほとんど知られていない。この『盤古』は、もともとは毛沢東派ではなかった。しかし、なぜ『盤古』は、毛沢東が香港の主権を直ぐに回収すべきだと考えていなかったにもかかわらず、毛沢東思想を熱烈に支持するグループに変わったのだろうか。しかも、この毛沢東派への変更は、文化大革命の惨状が香港に伝わるなかで進行したのだった。だからこそ、中国近現代史研究者は問わなければならない。なぜ『盤古』は毛沢東派へと変わったのか、そして毛沢東思想の何に期待したのか、と。

もちろん、この問いを立てるにあたり、中国近現代史研究者がまず説明しておかなければならないことがある。それは、なぜこの課題を突き詰めることが毛沢東研究を含む中国近現代史研究にとって重要なのか、ということである。これに対する回答は、おそらく次のようになるだろう。すなわち、この問いの意義は、20世紀後半の香港における政治思想史研究<sup>(3)</sup>を開拓するという狭い意味だけにとどまるものではない。20世紀後半の中国、香港、台湾で連鎖していた政治思潮のうち、反共から反共反国(中国共産党にも中国国民党にも反対する)へと変質していったリベラリズムは1960年代後半に香港でも台湾でも弱体化し、そのなかで親共ナショナリズム(「親共愛国」)が香港で拡大する可能性を秘めていた。ところが、実際にはそうならず、香港は、中国や台湾と連動しながら、1970年代後半から1980年代にかけて新しい政治思潮の時代を迎えることになった<sup>(4)</sup>。『盤古』はまさに中国、香港、台湾という広がりの中で発生した、反共反国のリベラリズムから「親共愛国」へという変化、そして「親共愛国」の退潮という一連の過程をすべて体現するものであり、だからこそ、その推移そのものを分析することに意義があるということになる。

以上のように本論の研究意義を中国近現代史研究の文脈において確認した上で、政論誌『盤古』が香港の政治思潮のなかでどのような位置を占めていたのかを確認することから始めたい。なぜなら、そうしなければ、『盤古』は何から毛沢東派へと変わったのか、そして、その変化は香港のどのような言論界の状況下で発生したのかをまったく見通せないからである。

<p>6114 28 NOV 1973 創刊號(1)目錄</p> <p>丁未年二月二日(1967年3月12日)出版</p>		<p>我們的宗旨： ①以理智態度探討中國傳統文化； ②以客觀立場介紹西方學術新知； ③以獨立觀點評論當前香港、中國及世界問題； ④以實際精神從事文學、藝術及學術之創新。</p>	
人與盤古(代刊詞)	2	本刊同人	
開關與承擔	6	蔡康平	
阿瑟·韋遜和中國詩	8	古芬格	
中國人眼裡的鴉片戰爭	11	黃濟泓	
章理論翻譯	14	吳震鳴譯	
地球上的文化	18	本刊資料室	
原我·自我·超自我(盤古辭典)	18	本刊資料室	
袁正清與中國文化論戰	20	唐心泰	
談中國運費正清	22	四馬	
愈錦與季孫(專訪)	24	彭城	
小說與電影	26	舒明	
村莊與信口開河(書評)	29	盧峯	
中國文明與官僚制(書評)	30	楊中台	
花的性情與象徵(書評)	31	黃若樑	
猴三十四	32	黃若樑	
如果這方有戰爭	33	余光中	
封面設計		文隴	

圖1 『盤古』創刊號(1967年3月)の目次：毛沢東思想を称賛する雰囲気はない。

<p>悼念毛主席逝世特刊</p> <p>1976年10月出版</p>		
誓將遺志變宏圖(盤古之聲)	2	本社
毛主席怎樣發展馬列主義 ——「黨內資產階級」理論的重大意義	6	胡永靈
毛主席永遠屬於全世界革命人民	13	梁木
毛主席永遠活在我們心中		
敬愛的毛主席安息吧	20	余行進
朽株成蔭	21	文征途
是誰使黃河慢慢變清 一個曲折的過程	22	古蒼梧
毛主席給了我們過去、現在與將來 沿着毛主席的革命路線改造自己	24	彭志祥
繼承遺志 促進統一 放下包袱 輕裝前進	26	梁玉崑
毛澤東在國際共產主義運動中的地位 毛主席使我轉變， 主席，我們不會辜負你！ 要化悲痛為力量	27	高菊馨
黨內的歷次路線鬥爭	28	趙春萌
毛澤東選集介紹	30	李沛英
誓將紅旗插到寶島上！	31	史軍
星星之火，可以燎原 ——井崗山的道路	33	裘薇
延安精神永放光芒	34	王邁
毛主席的革命故事	35	何月關
	36	李大凱
	43	人民日報
	54	章尚港
	57	張慕紅
	65	林海源
	72	資料室

封面：瀋陽市大型雕塑「把革命進行到底」

圖2 『盤古』毛沢東追悼特別号(1976年10月)の目次：毛沢東思想を称える文章で埋め尽くされている。

## I 20世紀後半の香港における政治思潮

香港現代史研究は、現在に至るまで、それほど活発ではない。その主たる理由は、少なくとも2つあるだろう。第1の理由は、イギリスの植民地統治下に置かれ続けた20世紀後半の香港では、中国国民党（国民党）と中国共産党（共産党）が、米ソ冷戦と中台分断という内外情勢を反映するかのように陰に陽に様々な活動（「工作」）を展開し、だからこそ一次史料にもとづく実証研究が難しかった、ということである。第2の理由は、20世紀後半の香港では、イギリスの香港政庁が抑圧的な政治システムを改革せず、イギリス優位の資本主義経済が維持され、さらには、国共対立の深刻化が中華アイデンティティの分断をますます深めたことから、多くの中国近現代史研究者が香港の社会と文化には見るべきものがないはずだ、とやや誤解してきたことである。

もちろん、香港現代史研究が全般的に低調だったとはいえ、その重要性が香港研究者によって忘れ去られたことはない。日本語文献でいえば、谷垣真理子、倉田徹らの研究が、中国語文献でいえば、陳学然、江関生、羅永生、呂大樂、孫揚、趙永佳、周愛靈、周奕らの研究が、英語文献でいえば、Christine Loh、Cindy Yik-yi Chu、Nancy B. Tuckerらの研究が蓄積されてきた——これらの研究動向整理は、香港研究者によって、いずれ的確になされることだろう——。ここでは、本論で検討する政治思潮を扱った研究もしくは回想録のうち、香港の時間軸に注目したものとして、谷垣真理子、倉田徹、區志堅、盧璋鑾（小思）の諸成果があることのみを具体的に指摘するにとどめ<sup>(5)</sup>、20世紀前半の中華民国史の文脈から20世紀後半の香港の政治思潮を概観しておきたい<sup>(6)</sup>。

イギリス領香港における国民党と共産党の立場は、1949年で基本的に逆転した。共産党は、中華民国（民国）が台湾に撤退する1949年まで、民国が統治する大陸において国民党から弾圧をうけてきたことから、自らの活動を迂回して展開する場所として香港を利用した。ところが、人民共和国が成立し、イギリスによって承認されると、今度は逆に、民国の大陸への復帰をめざす国民党が自らの中華の正統性をアピールする場所として香港を利用するようになった。

具体的にいえば、共産党は、1949年以前においては、大陸で弾圧された左派系紙（『文匯報』など）を香港で支援するなどして、地下工作を展開した。しかし、1949年からは、香港の新華社を拠点とする地下工作を維持する一方で、民国期に最大の民営紙として存在感を放っていた『大公報』を左派系紙へと改変し、香港言論界を積極的にリードしようとした。確かに1950年代における共産党の香港政策は成功したわけではなかったが<sup>(7)</sup>、民国を支持する反英運動（1956年の九龍・荃湾暴動）が暴徒化して、国民党の威信が香港で低

下するなど、共産党にとって有利な情勢がたびたび出現した。1960年代後半には、反英抗争によって「親共愛国」が香港社会で高揚すると、共産党を支持する勢力が新たに現れ、1970年代に創刊された『七十年代』（のちの『九十年代』）は、創刊からしばらくは親共の論調をたびたび掲げた。

他方の国民党は、1940年代以前から『国民日報』（のちの『香港時報』）を発行し、『工商日報』、『華僑日報』、『星島日報』に対して政治的にも経済的にも影響力をもっていた。しかし、その国民党は、1949年以後も基本的には同じスタンスで香港言論界に対して影響力を行使しようとしたが、大陸から台湾へと撤退を余儀なくされた情勢下では、米国（アメリカ）と歩調を合わせた文化工作をより重視しなければならなくなった。つまり、冷戦下の香港でアメリカと連携しながら香港言論界に対する資金援助をコントロールし、そうすることで自らの影響力を何とか維持しようとしたのだ<sup>(8)</sup>。

以上が、国共両党からみた、20世紀後半の香港における政治思潮の見取り図となる。しかし、これらには分類できない、リベラルな政治思潮も存在した。それは、さらに細分化すれば、凡そ3つに区分できる。

1つ目は、社会主義や共産主義には賛同しないが、政治勢力としての共産党を含めて多元的な言動を認めるという、容共のリベラリズムである。2つ目は、共産党の独裁政治をイデオロギーの側面からも徹底批判すると同時に、台湾の国民党が強化しつつあった独裁政治に対しても厳しく対峙するという、反共反国のリベラリズムである。このリベラリズムは、民国の憲政を正常化することで——民国は1947年に中華民国憲法に基づく憲政の時代を迎えたが、1950年代以降の台湾ではその憲政を事実上凍結してしまった——、民国によって民主政治を再び大陸へと拡大し中国の統一を果たそうとした。反共反国のリベラリズムのグループには、反蔣介石派の国民党員、民国期に第三勢力と呼ばれた中国青年党（青年党）や中国民主社会党（民社党）で活躍した政治家や知識人が含まれ、日中戦争期に日本側に協力したが故にその後に香港に流れ着くほかなかった「漢奸」と呼ばれた人々の存在も背後に見え隠れしていた。1950年代の『自由陣線』、1960年代前半の『聯合評論』は、この代表例である。3つ目は、中華の伝統文化の核心である儒教から近代西洋の価値や理念を見出そうとする、いわゆる現代儒家のリベラリズムである。1950年代から1960年代半ばまで台湾と香港で影響力をもった『民主評論』は、その代表例である。1960年代前半に香港中文大学が組織され、その後、中国語教育の普及と中華アイデンティティの再生が香港社会から繰り返し問題提起されることになるが、現代儒家のリベラリズムは、広く解釈すれば、これらの社会運動を支える1つの基盤を形成した<sup>(9)</sup>。

ただし、様々な立場の人々が混在し、人々の流動性が極めて高い香港において、その政

治思潮をきれいに分類することは不可能である。たとえば、1949年以後も大陸から香港へと南下する人々は後を絶たず、そのような人々は、上述のリベラリズム勢力のいずれかに共鳴することもあれば、リベラリズムとは無関係に、香港独自の社会や文化のあり方を日常生活という実践の場から黙々と探求することもあった。そのような政治思潮の代表例が『中国学生周報』や『祖国』、『人生』だと解釈できる。とりわけ『中国学生周報』は、1960年代から1970年代にかけて、青年層を中心に広範な影響力をもった<sup>(10)</sup>。こうして香港社会を内在的かつ中立的な立場から論じる民営紙も求められるようになり、その社会的な欲求に応えようとしたのが1959年創刊の『明報』だった。

やがて、大陸の人民共和国が文革を発動すると、香港では、それに共感して共産中国による統一をめざす「国粋派」(文革期の毛沢東派)が現れた。しかし、文革に反対する勢力も多数存在し、国粋派とは対照的に、香港の内部から香港の未来を思考する「社会派」(本土派)もまとまりをみせ始めた。さきの『中国学生周報』や『祖国』は、この社会派の地盤を緩やかに形成していった、とみなせるかもしれない。

それでは、以上のような香港の政治思潮のなかで、『盤古』はどのような位置を占めたのだろうか。結論を先取りしていえば、『盤古』は社会派に属した政論誌から国粋派を最も代表する政論誌へと変化し、その理由は『盤古』に集った若者が毛沢東思想や文革思想の何かに期待したからではなく、それぞれの信念を実現するための一つの方法として文革の人民共和国に自ずと親近感を覚えたからだ、ということになる。以下では、この点を詳しく説明しながら、香港における毛沢東思想の受容について考察していきたい。

## II 『盤古』の立ち位置と特徴

『盤古』は、1967年3月12日から1978年7月15日まで発行された。その発行期間は、香港現代史のターニングポイントとされる反英抗争から、文革が収束して改革開放が公式に始まろうとした時期までである。その理念は、「理性的な態度で中国の伝統文化を探究し、客観的立場から西洋の学術と新しい知識を紹介し、独立した観点から香港の現状および中国問題、世界問題を論評して、文学、芸術、学術の創造に誠心誠意努力する」というものだった。その発行場所——香港九龍城郵箱9314号——は、歴史的に権力の空白地帯となった九龍城だったため、『盤古』は香港における自由と自立を最大限に謳歌しているかのようだった<sup>(11)</sup>。また、発行部数は創刊当時には4千部ほどしかなく(『盤古』第2期、1967年4月15日)、アメリカや国民党の文化工作機関である友聯社から資金を提供されていたようである。それでも、『盤古』の経営は、1960年代後半においては、著名な彫刻家の文楼(文

宝楼／1933年～現在／広東省新会の人)や経歴のやや不明な梁宝耳らの援助にも支えられていたようで、1970年代に入ってから、独立採算を原則とするようになった。また、指摘しておくべきは、経営が自立化する傾向にあったとはいえ、その論調をリードする中心的な担い手が存在したわけではなく、実態は青年知識人を中心とする若者の連合体だったことである<sup>(12)</sup>。そして、1970年代に入ると、香港の政治運動や社会運動——尖閣諸島を中国固有の領土と主張する「保釣運動」など——に参加した人々とも広く連携するようになった、ということである<sup>(13)</sup>。

とはいえ、著名人が『盤古』にまったく関与しなかったわけではない。『盤古』に名を連ねた著名人には、『中国学生周報』社長や『明報』主編などを務め、のちに戦後香港のリベラル派として知られることになる胡菊人(胡秉文／1933年～現在／広東省順徳の人)、「飛哥」の愛称で親しまれた青年知識人岑逸飛(Shum Yat Fei、岑嘉駟／1945年～現在／江西省興国生まれ、広東省順徳の人)らがいた。さらに、戦後香港の言論界を牽引した一人、戴天(戴成義／1937年～現在／モーリシャス生まれ、広東省大埔の人)もいた。戴は、台湾大学で海外文学を専攻した後、『現代文学』(1960年3月～1984年3月)の編集員や香港文学芸術学会会長などを歴任することになった人物である。『盤古』と命名したのも彼だった。その意図は、盤古という神話上の人物が重視した自由の精神を实践する、という意志を示すためだった<sup>(14)</sup>。

なお、胡菊人や戴天は友聯社の構成員でもあった。ほかにも、彼らと同類の関係者が『盤古』には存在した。たとえば、林悦恒(詳細な経歴は不明)は、胡と同じように『中国学生周報』の社長を務めながら、友聯社にも関与していた<sup>(15)</sup>。

それでは、『盤古』はどのような特徴をもち、どのような経緯をたどったのだろうか。『盤古』は、創刊当時から現在に至るまで、次のような特徴をもつ政論誌として認識されている<sup>(16)</sup>。

- (1) アメリカの近代化理論を活用した。
- (2) 当時のアメリカで流行っていたニューレフトの思潮、つまり高度に資本主義化した支配体制にも伝統的な左翼思想にも批判的で、急進的な革命を志向する考え方や、ヒッピー式の思考、つまり既存の価値観や制度に縛られた人類の生活スタイルを否定する考え方から影響をうけた。
- (3) 香港社会は、1960年代以降、徐々に社会派と国粋派を形成していき、『盤古』は前者から後者の毛沢東派へと旋回していった。
- (4) 大陸への復帰(「回帰」)を香港で初めて提唱し、香港におけるアイデンティティ論の活性化に貢献した。

これらの特徴をまとめると、『盤古』は、「客観的立場から西洋の学術と新しい知識を紹介」し、「独立した観点から香港の現状ならびに中国問題、世界問題を論評」するという理念を実践しつつ、資本主義であれ社会主義であれ、既存の体制を近代化理論によって抜本的に改革しようとした、いわば近代的革命論を形成していった、ということになる。そして、文革を主導する毛沢東の共産党を肯定的に評価することで、文革を経て誕生するはずの新しい共産中国を夢想し、そこに香港が復帰すればよいと考えるようになった、ということである。本論は、近代化理論が文革の肯定的評価にどのように結びついたのかという哲学的な問いには立ち入らないが、このような特徴を徐々に押し出すことになった一連の過程については重点的に分析しておきたい。

### Ⅲ 毛沢東派『盤古』への布石

『盤古』は、独立の精神を重んじて創刊された。したがって、創刊からしばらくは、台湾の民国にも大陸の人民共和国にも肩入れすることはなく、まして「愛国」の精神を強調することもなかった。たとえば、反英抗争が香港で発生した際にも、政治的態度を明確には表明せず、いかなるナショナリズムも扇動しなかった<sup>(17)</sup>。むしろ、反帝国主義を利用して人民共和国に対する「愛国」の精神を高めようとした香港の左派人士には、嫌悪感を示したほどだった。決して「親共愛国」ではなかった。たとえば、『盤古』は、その社説で次のように述べている。反英抗争を支持する香港の左派人士は、共産党を裏切っている。なぜなら、香港社会の矛盾点を洗い出す際に、香港エリート層の特権ばかりを批判し、結果的に、自らも享受しているはずの「資産階級化した生活水準」については目をつぶっているからである、と。『盤古』は、香港の左派人士が共産党に対して積極的な行動を示すことで文革を主導する毛沢東や林彪の一派に、そして何よりも毛沢東思想に対して表向きの忠誠を示そうとしているに過ぎない、と痛烈に批判したのである<sup>(18)</sup>。

こうした「愛国」でも「親共」でもない、それ故に文革を肯定的に論じたわけでもない『盤古』の政治的態度は、別の言葉でいえば、中立と自由の気風を重んじる、というものだった。これは、胡菊人が創刊当初から関与していたことにも関係している。事実、胡自身は、リベラリズムについても論じていた<sup>(19)</sup>。もちろん、「親共」でないことが「親国」（国民党支持）を意味したわけではないし、台湾の民国に期待する「愛国」へと傾斜したわけでもなかった。むしろ、『盤古』の論調は、まったく逆の方向へと向かった。というのも、国民党は、1960年に台湾のリベラルな政論誌『自由中国』を弾圧したのに続いて、それから約5年後には、リベラル派の殷海光が主宰した『文星』に対しても停刊処分を下し、



そうした独裁化した国民党に対して『盤古』は嫌悪感を示したからである。『盤古』は、『文星』への同情を隠さず、いわばニューレフト流の既存政治の徹底的打破という精神に基づいて、あるいはヒッピー式のラディカルなりベラリズム精神に基づいて、国民党に対する批判を強めていった<sup>(20)</sup>。

しかしながら、国共両党のどちらにも与しない『盤古』は、結局のところ、どこに向かえばいいのかという問いを突き付けられることになった。だからであろうか。『盤古』は、香港や台湾などに点在する海外華人が大陸にもっと関心を向けるべきだと訴えるようになった<sup>(21)</sup>。この論法は、『盤古』においては、ある青年知識人によって鮮明に打ち出された。そして、この青年知識人の主張こそが『盤古』を変化させる主因となった。

それでは、その人物とは誰なのか。このキーマンとなった人物は、現在もまったく無名な知識人、包錯石（本名は包奕明）だった。包の父親は民国の立法委員（包華国）であり、弟は国民党員（包奕洪）だったことから、彼はいわば台湾のエリートだった。ところが、包は、台湾大学法学部在籍中に国民党を批判して逮捕監禁され、のちにコロンビア大学に留学し、1960年代後半に香港に流れ着いた。彼は、欧米化された青年知識人であると同時に、国民党を中心とする民国には厳しい姿勢で臨む青年知識人でもあった。その彼が中心となって執筆した文章で、当時の香港で圧倒的な影響力をもつことになった歴史的文章が、「海外中国人の分裂、回帰、反独立」だった<sup>(22)</sup>。

この文章の趣旨は、タイトルに濃縮されている。すなわち、海外華人が積極的な役割を果たして中国を1つにする、というものだった。その際に、この論文が異彩を放ったのは、アメリカの近代化理論を援用しながら、社会動員を最大化させた政権として毛沢東の共産党を高く評価した点にあった。

実は、包錯石は、この歴史的文章を公表する少し前から、香港言論界に旋風を巻き起こすことになった別の文章を、立て続けに『盤古』に寄稿していた。一連の文章で包が主張したことは、海外にいる華人知識人が、反共文化工作としての共産中国研究（「匪情」研究）を西洋の学術潮流に合致した客観的な中国研究（「国情」研究）に改変し、アメリカの近代化理論に依拠しながら、香港から中華アイデンティティを探究すべきだ、というものだった<sup>(23)</sup>。反英抗争直後の当時の香港では、イギリス香港政庁が香港の自立性を模索する動きと共産党の活動とが結びつくことを警戒していただけに、また、文革のような極端にラディカルな政治運動が香港で発生することも警戒していただけに、「親共愛国」へと世論を導きかねない包の文章は香港メディア界ではなかなか採用されなかった。最終的にこの非主流派の文章は中立と自由を重んじる『盤古』によって拾われた、というのが実情だった<sup>(24)</sup>。

以上のような香港の政治思潮の下で、包錯石は「海外中国人の分裂、回帰、反独立」を公表した。この文章は、「回帰」という概念を「特定の政権や聖人」に向かって復帰するという意味ではなく、「現在の中国は現代化へと向かっており、まさにその膨大な民衆と土地」に向かって復帰するという意味で使用した。分かりやすくいえば、香港の主権をイギリスから回収するという意味ではなく、中華アイデンティティを統合するという意味で使用した、ということである。そして、その統合の行先として、大陸の「現在の中国」を想定したのだった。というのも、「現在の中国」は近代化を達成しつつあると認識していたからである。ここでいう近代化とは社会動員を達成することであり、その動員の成否はナショナリズムと工業化と国民教育にかかっている、ということだった<sup>(25)</sup>。たとえば、包は次のように述べている。

共産党の功罪がどうであれ、誰もが否定できない事実がある。それは、共産党政府が工業化、農業集団化、国民教育を効率よく達成し、そのなかで大陸の民衆が中国史上最大規模の社会動員を達成した、ということである。以前の政権では、帝政であれ民国であれ、中国社会は挙国一致を実現できず、中国人がもつ潜在能力や中国の土地がもつ潜在的な豊かさを十分には引き出せなかった。この事実は極めて重要である。なぜなら、中国が資格をもった大国なのかどうか、海外の中国人が中国人民として復帰するに値するか否かは、中国が十分に動員されているか否かに基づいて判断するほかないからである<sup>(26)</sup>。

包錯石が最も重視した社会動員およびそれを構成する3要素は、彼からすれば、社会学の近代化理論に合致したものであり、その近代化理論を毛沢東の共産党および人民共和国が実践している、というわけである。彼は、「知識人は貧しい中農や下農による再教育を受けべきだ」といった文革を想起させる言い回しを随所に使うなど、毛沢東を肯定的に評価した<sup>(27)</sup>。

こうして『盤古』は、少しずつ「親共愛国」色を強めていった。その後も、台湾の独立に反対する社説を掲載し、台湾を「解放」するためには先ず香港とマカオを復帰させなければならない、と主張した<sup>(28)</sup>。

ただし、『盤古』の「親共愛国」化に対して、内部から異論がなかったわけではない。むしろ、包錯石らへの痛烈な批判が出された。いわく、包錯石は共産党に対する認識が不足している<sup>(29)</sup>、包錯石は共産党の宣伝工作を請け負っているに過ぎない<sup>(30)</sup>、といった全面批判である。『盤古』は、様々な立場の青年知識人を中心とする連合体だっただけに、包の論

文は誌面の活性化にはつながったが、同時に、内部の亀裂も広げてしまった。その亀裂が決定的となったのが、1971年に香港社会で高揚した「保釣運動」に対する反応の違いだった。

すでに述べたように、『盤古』は、もともと「親共」でも「愛国」でもなく、文革に対しても肯定的な言説を積極的に展開していたわけでもなかった。どちらかといえば、共産党にも文革にも否定的だった。ところが、『盤古』の内部には、その客観的論評を旨とする科学的手法に対して葛藤が生じつつあった。つまり、知識人にありがちな理論偏重を戒め、現実に向き合うべきだとする立場が現れ始めた<sup>(31)</sup>。

こうした葛藤が内部で蓄積されていくなかで、「保釣運動」が香港社会で急速に広まっていった。この運動は、日本の尖閣諸島の領有権主張に対して反発した、一種の中華ナショナリズム運動だったが、その際の中華ナショナリズムの主体とは台湾の民国なのか、それとも大陸の人民共和国なのか、あるいは、そのどちらでもないとするれば、主体はどこにあるのかが、香港の内外から切迫して問われることになった。というのも、「保釣運動」が高揚した1971年は、国連の中国代表権が台湾から大陸へと切り替えられ、冷戦下にもかかわらず、中米関係も日中関係も改善されつつあった年だったからである。中国問題は、まさに国際社会の場においても浮上していた。

こうした香港社会の現実と国際社会の現実に対して、『盤古』の関係者たちは、どこまで向き合っているのか、と自問することになった。そうして、やがて『盤古』の内部では、「保釣運動」にしっかりと反応し、社会との連携を深めることが大切だとする雰囲気が高まっていった。さらに、重要なことは、この現実を直視する思考が文革という壮大な実践的運動に対しても共感を呼び起こすようになったことだった<sup>(32)</sup>。香港の社会運動に積極的に反応するようになった『盤古』は、その社会運動の担い手が同時代のニューレフト運動にも共感していたことから、香港において徐々に支持されるようになった。実際、1970年代前半の『盤古』の売り上げは堅調であり、その経営状況は安定した<sup>(33)</sup>。

もちろん、副作用も発生した。『盤古』の「親共愛国」化は、香港の左派勢力との結びつきを強めただけに、胡菊人らリベラル派もしくは政治的には中立だったメンバーを退出させることになった。当時、親共的論調をしばしば掲載していた政論誌『七十年代』はやがて文革を否定的にとらえて反共へと様変わりし、その責任者の李怡（1936年～現在／広東省広州）もリベラル派として活躍するようになった。『盤古』は、こうした動きとは正反対の反応を示したわけである。

1971年の「保釣運動」で内部分裂した『盤古』<sup>(34)</sup>は、翌年からは、親共の中華ナショナリズムを全面に展開して<sup>(35)</sup>、共産党に同調するかのような反帝国主義の論理を押し出して

いった<sup>(36)</sup>。さらに、「親共愛国」化した『盤古』は、文革を支える毛沢東思想についても、その実践的意義を香港社会に対してアピールするようになった。

#### IV 毛沢東派としての『盤古』

---

『盤古』が毛沢東思想を明確に肯定したのが、同誌の社説「盤古の声」に掲載された「毛沢東思想の4つの精神」だった。ここでいう4つの精神とは、自力更生の精神、人民に奉仕する精神、理論と実践を重視する知行合一の精神、果敢に新しいものを創出しようとする革命の精神だった。『盤古』は、この4つの精神をもつ毛沢東思想を、次のように絶賛した。

これらの4つの精神を俯瞰すると、いずれも中国近代の自強運動にとって不可欠な精神だったことが分かる。共産党は、22年間の統治で、この4つの精神をほぼ貫徹させた。〔確かに、「大躍進」や人民公社の初期段階での失敗、あるいは政治主義の蔓延によって文化が窒息するといった問題が生じたが、〕中国の富強という点からみれば、これらの問題は重視されなくても良い。……毛沢東思想の貢献は、中国近代史の要求をほぼ満たしたということである。もとより、中国も永遠に今の段階にとどまっているわけではない。中国もひとたび豊かになって強くなれば、その文化の生命力は自ずと蘇ることになるだろう。これが、私たちが今日の中国大陸に期待していることでもある<sup>(37)</sup>。

さらに、「盤古の声」は「我が香港の『牛鬼蛇神』〔文革期の打倒すべき旧支配階級〕の世論に宣戦布告する」と題した長文の論説を掲載し、毛沢東思想を崇拜する人々の論法を用いて——「牛鬼蛇神」というタイトルもその1つである——、共産党および社会主義に対する賛辞を惜しまなかった。その象徴的な一節は、次のとおりである。

『盤古』の構成員は、それぞれに違った思想経歴をもっている。そのため、〔その内部では〕思想闘争がたびたび繰り広げられてきた。しかし、『盤古』の構成員は中国に対する見解をそれぞれもっているとはいえ、それでも、大きな方向性では、もしくは大きな原則においては、1つになってきた。すなわち、『盤古』同人は、社会主義が中国史の発展に合致し、社会主義が中国人民に合致した制度であることを一致して認めてきたのである。私たちがこの結論をもつに至った客観的な要因は、次の2つに他ならない。1つは、私たちが資本主義社会で生活するうちに、知らず知らずのうちに、資

本主義社会の腐敗を身にしみて感じるようになったからである。……もう1つは、理論面において、私たちが「紋切り型の反共の言説」を論破すればするほど、とりわけ台湾の蒋介石独裁政権（「小王朝」）が中国大陸の実情を意図的に曲解しようとしてきた言説を論破すればするほど、共産党による人民共和国の成立（「建国」）がいかに労多きものだったのかを十分に理解できるようになったからである。辛亥革命以来、中国では様々な主義が試されてきたが、結果として、どの主義も成功しなかった。ただ社会主義だけが帝国主義の中国侵略に対して効果的に抵抗し、中国を独立自主、そして自力更生の道へと歩ませたのである<sup>(38)</sup>。

ただし、『盤古』は、自分たちが社会主義を肯定したからといって、自分たちが共産党の宣伝誌に成り下がったわけではない、とも読者に釘を刺した。と同時に、共産党を批判することで、中国の社会主義建設を好転させられるはずだ、との立場も示した<sup>(39)</sup>。

とはいえ、『盤古』は、共産党の社会主義の核心に位置する毛沢東思想をなぜ評価できるのかを説得的に論じなかったため、この弁明は空虚にも映った。つまり、『盤古』が毛沢東派に旋回していった主たる背景が前節で確認したような経緯に由来することから、『盤古』は共産党の何を批判して、理想の社会主義をどのように実現するのかをそれほど自覚的に論じていたわけではなかった。さらに、やや厳しめの評価を下すならば、『盤古』の変化の一因が1970年代前半の国際情勢の変化にも求められるだけに、結局のところ『盤古』は、中台対立と米ソ冷戦という国際情勢において中国が国連に復帰したという現実を直視して、いわば国際社会の勝ち馬に乗ろうとしただけではないのか、とみなせなくもないのである。

もちろん、毛沢東派としての『盤古』は、「そうではない」と力説し続けた。その代表的な試みが、「文化大革命ののちの中国」と題された座談会だった。この座談会の参加者は、李清栄（座談会主席）、李青雲、周放漁、劉創楚、呉兆華ほか4名であり、いずれも無名の青年知識人だった。

「文革」には1つの特質がある。それは、特権に反対し、専門主義に反対することである。……[現在のソ連のように、] 人民が政治に対して覚悟を低下させると、政治は少数者によって専有され、いわゆる官僚による専制政治が招来されてしまう。「文革」は、この問題も解決しなければならないのである。なぜなら毛沢東は、大衆も党もすでに〔社会から〕認知され〔、官僚による専制政治などもってのほかだと話し〕ているからである。しかし、さらなる問題は、もし党が大衆から離れてしまった場合、ど

うすればいいのか、ということである。〔実のところ、私たちがこの〕歴史上の問題にまだ直面していないのは、「文革」がこの問題を解決するために、あらゆる特権主義を打破しているからである。

さらに毛氏は、次のようにも述べている。すなわち、社会主義国家が変質すると、それは普通の資本主義国家に成り下がるだけでなく、容易にファシズム国家のようになってしまう、と。これは完全にそのとおりである。「文革」が発生した際、ある人々は、毛氏が自分の手で自分が創設した党を潰して自滅した、と考えた。確かに、中国共産党は2千万人強の党員をかかえる大政党へと発展したが、7億の人口を有する中国では依然として少数勢力であり、だからこそ党は、〔大衆を〕指導する立場から、党と大衆を区別した。とはいえ、〔党が〕長期に発展していく過程において、このような区別を特殊化させていいはずがない。もしこうなってしまうえば、ソ連のような状況が容易に発生してしまうだろう。要するに、「文革」とは「門を開いて党を整理すること」であり、共産党は、下から上への大衆闘争のなかで、自らを変革しなければならないのである<sup>(40)</sup>。

この文章が興味深いのは、毛沢東思想に対する高い評価がソ連批判と結びついていた、ということである。このポイントを次節で確認しておきたい。

## V ソ連批判と独自路線の追求

---

さきの文章を掲載した『盤古』同期には、さらに、次のようなくだりがあった。

共産党は、結党から現在までのわずか20数年足らずで、経済的にも文化的にも立ち遅れた、そして半植民地状態になっていた、この悠久の歴史をもつ土地を、社会建設で大成功させ、イデオロギーや社会制度の面においては世界を啓蒙する国家へと変貌させた。これは、決して偶然の出来事ではない。生産や社会建設で重要な役割を果たす科学技術は、中国では広く深く発展し、無視しえない巨大な成果を生み出した。と同時に、これらの成果は〔米ソと対立する〕困難な条件下で「自力更生」の精神に基づいて生み出されたのであり、〔そのことを考慮すれば、〕その意義はさらに高まることだろう<sup>(41)</sup>。

要するに、この文章は、中国を「自力更生」へと導いたのは科学技術の発展にあり、そ

の発展は毛沢東によってもたらされた、といたいわけである。

しかし、そもそも論として、なぜ中国はソ連化を放棄して「自力更生」へと向かわざるを得なかったのか。『盤古』がみるところ、やはり当時の一般的な見方と同じように、ソ連に対する不信感が根強くあったからだった。少なくとも1970年代半ばの『盤古』は、アメリカの資本主義に加えてソ連の社会主義に対しても相当に不信感を募らせていた。その不信感とは、ソ連もアメリカと同じように対外膨張を続ける修正主義へと墮落した、というものだった。その証拠に『盤古』の関係者は『ソ連問題文集』と題した書籍を1975年に刊行し、序文に相当する文章「私たちがはっきりさせなければならないこと」で次のように主張した。

無数の事実が証明していることは、世界情勢がソ連の修正主義やアメリカの帝国主義がいうような「緩和」へと向かわず、この2つの覇権による争奪と結託こそが世界を不安定にさせている根源だ、ということだった。アメリカ帝国主義の仮面は、世界の人民が覚醒するにつれて、〔徐々に〕バラバラに引き裂かれた。しかし、ソ連修正主義の仮面は、〔ソ連に〕かぶらせたばかりなのに、紅色〔革命の色〕から黒色〔腐敗の色〕がにじみ出てくるような「〔偽〕社会主義」の色となり、その欺瞞性は〔アメリカ帝国主義よりも〕さらに大きく、その反動性もさらに深刻で、その侵略的行動に至ってはさらに狂気じみている！<sup>(42)</sup>

『盤古』の関係者はこのようにソ連を敵視した上で、続けて次のようにも主張した。

中国の神聖なる領土の一部としての香港は、祖国の南方に位置する玄関口であり、祖国の人民と世界各国の人民が友好的交流をはかる場所でもある。と同時に、帝国主義、修正主義、反動分子たちが転覆を図り、情報を探ろうとするのに最適な場所でもある。だからこそ香港は、反覇権にとっては、最前線なのである<sup>(43)</sup>。

ここで示されている「愛国」意識は、香港が中国の一部であり、その中国こそが祖国だという意識である。つまり、この「愛国」意識を基礎とした『ソ連問題文集』は、アメリカ帝国主義以上に深刻な問題を抱えているソ連修正主義を最大限に批判したかったわけである。この文集には「ソ連の世界規模での経済侵略」、「ソ連の世界規模での軍備拡張」、「ソ連の香港における10年来の諜報活動」と題された文章が収録され、ソ連による世界各地での搾取と陰謀がいかにかアメリカのそれと同質か、もしくはそれ以上なのかが強調されている。

この文集を通読して読み取れる1つの事実は、当時の香港の左派系知識人が、中ソ対立が公然化した1960年代からソ連の諜報活動が中国と香港を分断させようとしていると認識していたことである<sup>(44)</sup>。だからこそ、『盤古』の関係者は、ソ連批判という文脈から、本来あるべき社会主義建設をすすめるという意味で、「プロレタリア独裁下で革命を継続する」との文革の理念を1970年代半ばになってもなお信奉し続けたのである。その心情は、次のような引用箇所を端的に吐露されている。

〔中ソ論争が公然化してから発動された〕文化大革命は、理論面において、プロレタリア独裁下で革命を継続するという偉大な学説を提示した。また、実践面においては、修正主義を粉碎する方法や形式を提示した。さらに、文革開始後には、新たな政策（知識青年の思想改造、教育改革、農村で農業をやりながら医療業務にたずさわるはだし医者）が次々に打ち出され、それらはすべて共産主義の要素を含むと同時に、資本主義の復活を抑え込むための強力な思想武器にもなった。もっとも我われは「中国中心論」に陥ってはならない。つまり、中国がおこなっていることが正しく、他国がおこなっていることが間違っているとみなしてはならない。我われは愛国主義者であるべきだが、国際主義者でもあるべきである。我われは、このように振る舞えてこそ、高所から人類の発展の歴史を見渡せるのである。我われは、中国がソ連修正主義の無残な経験を真摯に総括し、国際労働運動〔第4インターナショナル〕の2つの路線〔スターリニズムと資本主義〕に対する闘争を真摯に総括し、理論面でも実践面でも数多くの共産主義に通じる道を示した、と認識している<sup>(45)</sup>。

ちなみに、この引用文の最後には「後記」が付されており、「ソ連はすでに社会〔主義〕の帝国主義に成り下がった」という厳しい文言が添えられている<sup>(46)</sup>。

## お わ り に

---

1970年代前半に毛沢東思想を崇拝する思想空間が香港に出現したことは、とても興味深い。『盤古』の関係者、とりわけ青年知識人たちは、文革の惨状を知りながらも、それでもアメリカ型の資本主義を嫌い、ソ連型の社会主義を嫌った。その姿勢は、換言すれば、米ソ冷戦が東アジアを覆うなかで、アメリカにもソ連にも追随することなく、中国独自の路線を香港から目ざそうとした、ということである。

しかし、このような政治姿勢は、毛沢東に対する個人崇拝を煽っているだけだとの批判



を免れなかった。そのため、『盤古』は、この種の外部からの批判に対して繰り返し弁明せざるを得なかった。たとえば、さきに引用した座談会「文化大革命ののちの中国」の参加者たちは、毛沢東が個人崇拜されていないかという問いかけに対して、「そうではない」と回答せざるを得なくなった。さらに、『盤古』が毛沢東思想を高く評価した理由についても、毛個人を神格化させるためではない、と説明した<sup>(47)</sup>。

『盤古』は、「毛主席逝去を追悼する」と題した記念号（1976年10月）で「毛主席は永遠に我われの心のなかにある」とのタイトルをつけて、文革期に用いられていた独特の言い回し——革命歌のタイトル「爹親娘親不如毛主席親」や紅衛兵が多用した「革命方知北京近，造反更覺毛主席親」を意識した言葉遣い——を随所に用いながら、毛主席への忠誠を改めて誓った。その記念号で、『盤古』本社は、次のように毛沢東思想を評価し続けた。

毛主席は私たちと永遠の別れを告げた！永遠の別れを！……私たち香港にいる中国の青年たちは永遠に忘れないだろう。あなたの輝かしい思想が、極端な私利私欲に走る個人主義の淵から私たちを救い出し、私たちに祖国の未来と人類の理想を知らしめたこと、そして私たちの心を晴れやかにして、青年のはつらつとした精神を回復してくださったことを。それなのに、私たちが成長しようとしているまさにこの時に、また、私たちが真理を渴望しているまさにこの時に、あなた様は私たちと永遠の別れを告げてしまった！〔私たちは〕革命によって誰よりも主席には親しみを感じ、闘争によって北京をますます近くに感じとれるようになった。私たちのような腐った資本主義社会で育った青年たちは、嫌というほど奴隷化教育をうけてきた。だからこそ、ひとたび革命の真理に触れたならば、貪り食うようにそれを追求し学習したのだった<sup>(48)</sup>。

『盤古』は毛沢東への忠誠心をこのように示した上で、さらに、文革後の中国に対しても明るい見通しを示した。

私たちには人類の先進的思想——マルクス主義、レーニン主義、毛沢東思想——があり、それらは私たちを正しい方向に導いている。また、私たちには、50年余り国内外で厳しい階級闘争の試練に耐えてきた、偉大で栄光のある、そして〔いつも〕正しい共産党という存在があり、その共産党はすべての中国人民を強力に牽引する核心的な存在でもある。さらに、その党のリーダーシップの下に、私たちには、プロレタリア独裁を支える人民の「子弟兵」たる中国人民解放軍が存在し、文革の試練を耐えてきた8億の中国人民もいる。これらはみな、私たちの勝利を根本的に保証するものである。

とりわけ文革後に出現した新しい事物は、おおいにたくましく成長している。ブルジョアの特権を制限し、共産主義の精神を発揚することは、まるで雨後の筍のように、阻止できない強大な潮流となり、一切の守旧派、頑固派を圧倒しつつある。まさに、将来の社会のために、新しい道徳、新しい風俗、新しい思想、新しい習慣が生まれ、創りだされようとしている。新しい事物の成長と発展と隆盛は、ブルジョアの復活を防ぐ積極的な力となっている。中国の社会主義の前途は、まさにここにある。……(中略) ……

私たち香港にいる中国の青年は、祖国の青年の一部である。私たちの命運と前途は、祖国の人民と密接に結びついている。偉大な革命の指導者はすでにこの世を去ったが、彼の教えと導きは私たち青年をますます鼓舞し、私たちがプロレタリア独裁を継承して人類の進歩のために力を尽くさなければならないと誓わせるものである<sup>(49)</sup>。

もともと、1970年代の香港において国粋派の影響力が減退すると、香港は中国に対する幻滅を加速させ、『盤古』のような政治思潮は中国独自の路線を追求する道から香港独自の路線を追求する道へと変容していくことになった。香港の人々が『盤古』の政治思潮に触れたことが香港アイデンティティを萌芽させる歴史的一因となった、と解釈される所以である<sup>(50)</sup>。この動きは、1970年代の東アジアで左派思想とその運動が退潮していくなかで発生した1コマと理解できるだろう。

最後に、毛沢東思想を絶対化した『盤古』は、当時の香港における「脱植民地化」の政治思潮と対抗関係にあったことを指摘しておかなければならない。

当時の香港には、中国語の公用化を求める運動が高揚し、イギリスの植民地統治体制と癒着した社会の「奴隷根性」を内部から一掃して「脱植民地化」を実現しようとする動きがあった。しかし、『盤古』は、毛沢東主導の文革によって新たに出現するはずの共産中国への復帰を夢想していたが故に、行き過ぎた反植民地意識が香港の独立志向を強めてしまうことを恐れていた。香港研究者の羅永生がこの文脈で重視する『盤古』第39期(1971年7月)掲載の文章、剣青「いまだ下されぬ定論——この半年間の『中文運動』についてのレポート」を引用して、本論を終えることにしよう。

「中文運動」の根本精神は、明らかに「中国語の公用語化」にあるのではない。それは、覚醒した香港の若者がいかに反植民地主義に取り組んだのか、ということに現れている。……次々に起こる香港本土の社会運動は、新しい設備を持つ古びた植民地を少しずつ打倒し、香港の独立を促すことになるかもしれない。あるいは、もう一つの

方向性は、「心を香港につなげよう」〔という「中文運動」のスローガン〕が改良主義の方法によって「官民の意思疎通を図り、繁栄と安定をもたらす」という可能性である。しかし、これらは香港に対する一方的で孤立した観方である。香港が中国の土地であることを忘れてはならない。……香港が中国に復帰する過程で、「香港独立」も「植民地擁護」もすべて障害物となり、ひいては台湾の独立のように外国勢力に利用されてしまうだろう。これらはすべて中国に対する犯罪行為であり、運動家が警戒すべき点である。したがって、香港の社会運動は「中国に向かって」でなければならないのである！<sup>(51)</sup>

## 註

- (1) 『毛沢東年譜（1949–1976）』第5巻（中央文献出版社、2013年）249–250頁。
- (2) 楊孫西「毛沢東在香港問題上の戦略遠見」（『人民網』2014年5月26日）。
- (3) 羅永生『誰も知らない香港現代思想史』（共和国、2015年）。また、メディア史から整理した研究としては、森一道『「香港情報」の研究——中国改革開放を促す〈同胞メディア〉の分析』（芙蓉書房出版、2007年）がある。なお、両書ともに『盤古』を分析している。
- (4) 中村元哉『中国、香港、台湾におけるリベラリズムの系譜』（有志舎、2018年）。
- (5) 谷垣真理子「香港における中国研究」（同ほか編『戦後日本の中国研究と中国認識——東大駒場と内外の視点』風響社、2018年）、倉田徹編『香港の過去・現在・未来——東アジアのフロンティア』（勉誠出版、2019年）、區志堅「自由なくして生きる道なし——1950年代香港の『自由陣線』」（中村元哉編『憲政から見た現代中国』東京大学出版会、2018年）、盧璋鑾（小思）〔熊志琴訪問・記録〕『双程路——中西文化的体験與思考1963–2003』（香港：Oxford University Press、2010年）、同ほか編『香港文化衆声道』第1冊（香港：三聯書店、2014年）、同ほか編『香港文化衆声道』第2冊（香港：三聯書店、2017年）、香港中文大学香港文学研究中心編『曲水回眸——小思訪談録』上（香港：Oxford University Press、2016年）、香港中文大学香港文学研究中心編『曲水回眸——小思訪談録』下（香港：Oxford University Press、2017年）。
- (6) 前掲『「香港情報」の研究』もあわせて参考にした。
- (7) 広東省档案館所蔵、中央宣伝部→華南分局、「対港大公、文匯編輯方針指示」（『中共中央華南分局档案』204 / 1 / 245 / 037、1950年9月18日）、広東省档案館所蔵、華南分局宣伝部・港澳工委→中央宣伝部統戦部、「關於周末報内遷問題之請示」（『中共中央華南分局档案』204 / 1 / 266 / 147、1951年10月31日）など。
- (8) 喬宝泰「中央政府遷台初期之中国国民党港澳政策——以雷震、洪蘭友之赴港建議為例（1950–1951）」（『港澳与近代中国學術研討会論文集』新店：国史館、2000年）。一次史料としても、党史館所蔵の「台（47）央秘字第087號張厲生呈第八屆中常會第三次會議密紀錄（3月3日）」（『總裁批簽』47 / 0038、1958年3月15日）や香港歴史档案館所蔵の *Control of Publications Consolidation Ordinance 1951: Freedom Front Weekly*（HKRS No. 1250, D&S No. 1/26）など多数ある。なお、前掲の拙著『中国、香港、台湾におけるリベラリズム』第7章

- は、これらの一次史料の一部を活用したものである。
- (9) 前掲『中国、香港、台湾におけるリベラリズム』。
  - (10) 註5の回想録を参照。
  - (11) しかし、九龍城が発行場所となったのは、たんなる偶然だったようである（2018年3月に香港の樹仁大学でおこなった聞き取り調査。この記録は、谷垣真理子氏を中心に、まとめられる予定である）。
  - (12) 『盤古』の若者たちは、特定の毛沢東思想や文革思想に必ずしも魅了されていたわけではなく、当時の世界的なニューレフトの思潮にも親近感を抱きながら、現状を変革したいと考えていたようである。
  - (13) 註5の回想録を参照。
  - (14) 本社同人「人与盤古精神（代創刊詞）」『盤古』（創刊号、1967年3月12日）。
  - (15) 註5の回想録を参照。
  - (16) 前掲『誰も知らない香港現代思想史』、前掲『「香港情報」の研究』、前掲『双程路』147頁など。
  - (17) 本社「我們對於九龍事件的看法」（『盤古』第3期、1967年5月22日）。
  - (18) 本社「香港左派分子出売了中共」（『盤古』第4期、1967年6月27日）。
  - (19) 胡菊人「自由主義再估值」（『盤古』第33・34期、1970年8月30日）。
  - (20) 前掲『双程路』148頁。
  - (21) 本社「海外華人知識分子的使命」（『盤古』第6期、1967年8月31日）。
  - (22) 包錯石ら「海外中国人的分裂、回帰与反独」（『盤古』第10期、1968年1月25日）。
  - (23) 包錯石「研究全中国——從匪情到国情」（『盤古』第8期1967年10月31日）、同「研究全中国——從匪情到国情」（『盤古』第9期、1967年12月20日）、同「再論中国知識分子和全中国国情研究的關係——兼答勞思光先生」（『盤古』第12期、1968年4月15日）。
  - (24) 前掲『双程路』148-149頁。
  - (25) 前掲「海外中国人的分裂、回帰与反独」。
  - (26) 前掲「海外中国人的分裂、回帰与反独」。
  - (27) 前掲『誰も知らない香港現代思想史』167頁。
  - (28) 么華（周魯逸／魯凡之）「要解放台湾应先收回港澳」（『盤古』第44期、1972年1月25日）など。
  - (29) 陳婉瑩ら「第一塊石頭——我們对回帰運動的一些建議」（『盤古』第13期、1968年5月20日）。
  - (30) 李金暉「為發『回帰』熱的人醫病——從包錯石的文看包錯石」（『盤古』第17期、1968年7月28日）。
  - (31) 前掲『双程路』150-151頁。
  - (32) 前掲『双程路』150-151頁。
  - (33) 前掲『双程路』143頁。
  - (34) 編者「關於『盤古』的变」（『盤古』第48期、1972年7月15日）。
  - (35) 盤古社「這是每個中国人都應該站起来 保衛国家的領土和主權的時候了——從「保釣運動」到「中国統一運動」、從保衛釣魚台到保衛台湾」（『盤古』第45期、1972年3月5日）。
  - (36) 特集号「回帰中国的路」（『盤古』第44期、1972年1月10日）。
  - (37) 盤古社「毛沢東思想的四種精神」（『盤古』第42期、1971年11月10日）。

- (38) 盤古社「向本港牛鬼蛇神輿論宣戰」(『盤古』第44期、1972年1月25日)。
- (39) 同上。
- (40) 盤古社・創建学会「中国在文化大革命之後——在意識形態和制度上有無實質的改變(座談会)」(『盤古』第45期、1972年3月5日)。
- (41) 張国青・王元令「從蘇聯化到自力更生」(『盤古』第45期、1972年3月5日)。
- (42) 盤古「蘇聯問題」編写組編『蘇聯問題文集』(盤古出版社、1975年)の序文。
- (43) 前掲『蘇聯問題文集』の序文。
- (44) 前掲『蘇聯問題文集』の「10年来のソ連の香港における諜報活動」。
- (45) 前掲『蘇聯問題文集』40頁。
- (46) 前掲『蘇聯問題文集』41頁。
- (47) 前掲「中国在文化大革命之後」。
- (48) 「誓將意志變宏圖」(『盤古』悼念毛主席逝世特刊、1976年10月)。
- (49) 前掲「誓將意志變宏圖」。
- (50) 前掲『誰も知らない香港現代思想史』のうち、とくに「60、70年代香港の返還言説」と題された文章に詳しい。
- (51) 前掲『誰も知らない香港現代思想史』145頁。